淨土

六月号

法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日　第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日　運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十七年五月二十五日　印刷　昭和三十七年六月一日発行

第二十八巻　第六号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊　浄土トラクト

在家の方々の為の
村瀬秀雄著
浄土宗勤行の解説　新書版九〇頁　定価七〇円　送料二〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に改訂、版も持ち易すい新書版として刊行
（百部以上五分引送料無料）

大正大学教授　佐藤良智著
真理のはなたば　新書版　定価七十円　送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門
青年会　婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八
申込先　法然上人鑽仰会
振替東京八二一八七番

大日方大乗著
仏教衛生学　B六判上製　三〇二頁　定価四三〇円　〒八〇

現代人の必読書

本書は衣・食・住・水・中毒の五項目にわたり、医学的見地より仏教資料を充分に駆使し、新しい分野を開拓している。人は健全な肉体と康安な精神とをもってはじめて健康であり、幸福の源泉があるのだ。ここに現代医学の学ぶべきところがある。
本書を忠実に活用してこそ仏教を現代に生かすことになろう。

大日方大乗著
仏教医学　B六判上製三一二頁　定価三五〇円　〒八〇円

東京都千代田区飯田町2の8
三幸出版社

浄土

六月号

かへすかへすも憍慢の心をおこすべからず。

法然上人御法語

中央アジア・アスターの
七世紀の墓で発見された仏像

浄土　六月号　目次

表紙　弥勒菩薩像（京都　広隆寺）

悲……石上善応…(一四)

季節の話　雨安居……巌峨諦教…(二四)

近代高僧伝　加藤鏡心……大橋俊雄…(一三)

実話　彷徨する子供……吉野翠幹…(一八)

佐藤賢順氏追悼特集

佐藤賢順君を悼む……真野正順…(二)

賢順さんを偲ぶ……佐藤密雄…(五)

父の思い出　三月二十八日の日記…佐藤成順…(一〇)

扉の御法語……(二三)

表紙の写真……(三)

シャボン玉……(一五)

ものを大切に……(一七)

これだけは……(二五)

子は親の幸福……(三)

賢順先生……(九)

力士の金剛珠……(三一)

聖典講義　偏依法然……竹中信常…(二六)

佐藤賢順君を悼む

真野正順

賢順君の赴報に接したときは、あまり急なので、ぼかんとしてしばらく実感がわいて来なかった。あり得ざることだからである。私が死んで君がのこるというのなら、よく分るが、私が残って彼が死ぬというようなことは、全くあり得ざることである。ところが、そのあり得ざることが、突然起ってしまったのだ。

まだ落ついて君の全体を考えるような気持になっていないが、少しずつ思い出して見ると、君は宗教大学ののち、早大に行って、故伊達保美君について哲学をやり、ボサンケットの論理学を飜訳出版して学界に出た。当時は哲学はおろか学問をつづける宗門青年などは実に寥々たる頃だったから、この事は大いに人意を強うした。ところで考えてみると、年々大学を出る青年の数は多いが、学問を続けるものの無いのは、どうも卒業後二三年の間、勉強をつづけるか否かに係っていると思われるので、志のある若い人達に毎土曜自宅で洋書なぞ読んであげる事にしたが、だんだん人数もふえて来たので、賢順君にも参加して貰うことにした。後に「土曜会」によばれた一群がそれである。読んだものは、リスデビッ夫人だのマクス・ワレーザー、ボッパーミン等さまざまであるが、その中にとりあげたフォイエルバッハに君は興味を感じ、その後発表したフォイエルバッハ研究は、君の学界への初のデビューで好評を博した。

その後、仏教復興の気運に、血の気の多い私は「法然上人鑽仰会」を企画する事になったが、この時、共に手をとって立上ってくれたのは、君と中村弁康氏だった。鑽仰会は、その資金は、まず金三百円ずつ（今で云えば十万円以上になろう）宗祖の前に焚いてしまう香のつもりで無条件に寄附してもらう事で、ずいぶん思い切って破天荒の企画

だったが、幸い全宗門から続々賛成を得て、やがて三十口にも達したので勇躍発会した。

それでまず、佐藤春夫氏に法然伝を依頼して東京毎日に連載し、他方、吉田絃二郎氏の脚本によって法然劇を六代目菊五郎によって歌舞伎座に上演する交渉準備全く備ったが、どうしても脚本が完成せず、この方は不発に了った。こうして一方に、大きく狼火を天空にあげて、社会の人目を集めておいて、他方、雑誌浄土を創刊して、手広く着実に会員を獲得してゆき、遂に発行部数二万を突破するに至った——今から思っても胸のすくような成績だったが、それには青年同志のなみなみならぬ奉仕的努力が注がれた為であった。特に賢順君には、はじめから総主事として会務を総摂してもらった。こういう業務的な部面は、君はあまり得意ではなかったけれど、熱心に努めてくれ、殊にその篤実にして誠意ある風格は、どれだけ会の厚味と信用を加えたか知れない。

こういう順況の最中に、私は急に病をえて倒れてしまったので、そこから起る内外の混乱はいろいろ君を悩ました事であったが、次第に切りぬけて行き、その後はこの「浄土」護持のために久しい間倦くことなく誠意を注がれ、今日この雑誌がさまざまの困難に堪えてとにかく三十年に近く自力で続いている事には君の力によることが多い。

その後転じて、宗門教学の体系的発展のために「浄土宗教学院」を企画した時にも、君はその重要な役割につき、私が退いた後はそれを引受けて、あの戦後の混乱の中を奔走して東北大会を開催するなぞ、大にい成績をあげてバトンを次の松濤誠廉君に渡した。

こういう風に数えてくると限りがない。その他、正大における主任教授または部長として大きな功績、ラジオや講演に残した巨きな足跡なぞ、全く現代宗門の筆頭代表であったことは、何人も認めていた処であろう。しかしもう余白も少くなったから、君の学問の方にうつる。

君は、初めの出発が論理学訳出であったように、特に明晰な論理的思索に長じていた。それをまた着実周到たる探及に併せて進んでゆく極めて堅実な学風だったが、またどことなく江戸っ子らしい気の利いた滋味をただよわせていたのも流石である。初めは先きに述べたフォイエルバッハの人間主義的宗教観を仏教原理と照し合して考えることに興味をもっていたらしいが、やがてそれに満足しえず、転じて当時盛んであったフッサールの現象学派の右派として宗教色濃いマクス・シェーラーに移った。然し何としても君の論理的傾向は、シェーラーのむしろ神秘的な超越神学的

な実質倫理には性が合わないらしく、やがて、おなじフッサールの左派と呼ばれるハイデッガーに転じて行った。

こうしている内に、君の論理的思索は更に深まり、一方ヘーゲルの弁証法論理と、他方樹竜なぞの空弁証法をならべ検討し、かくようやく君の独自なる領域を開拓しいだすに至った。それで弁証法についての価値ある労作は続々現われてきたが、最後に、かかる見地から浄土教的思惟をとり上げたものが、あの有名な「宗教の論理と表現」である。即ち、これは学位論文の主題であり、また昨年西独マールブルヒの大会においてを発表して注目を集めたものであり、また最近死後にようやく出版せられたものであるは云う迄もない。ここに至って、君の永い哲学的探求は、一の輝かしい到着点に達したわけである。

ありし日の佐藤賢順先生

しかし、君はこれに止まっていなかった。更に、この所獲の見地を以て、浄土教の中心論書の一である曇鸞の往生論註に向って行った。

おそらく、古来論註の研究は多いが、君ほどの哲学的、仏教学的準備資格を以てこの書に対する者は稀れであろう。その結果は誠に注目すべきものであり、我々も大いに激励を惜しまなかったのである。最近在家仏教協会において、それの連続講演をした。その序講の筆記が在家仏教誌に載っているのを見ると、（恐らくこれが君の絶筆となったかも知れぬ）実に周到なる態度と準備とを以て、とりかかっているのが分るが——噫、今はその人は無い。

赴報の翌日、とつぜん京都の塚本善隆氏が私の病床をおとずれ、君の急逝を嘆かれた末、将来の浄土宗学の全面的恢興のためには、君のような深い哲学的思索で鍛え上げた信仰の人を、学の中心に据え、そこから全体を再出発せしめるのでなければならぬ、と痛言されたが、私も悉く同感を禁じ得なかった。

誠に何とも埋めることのできぬ空虚をここに生じてしまった。

しかし、君の指導していた正大の哲学研究会は、俊秀な新進に満ちた最も充実した研究室と目されており、ことに峯島旭雄、田丸徳善両君の将来は、最も期待せられるからやがてその日の来るを目に浮べつつ、せめてもの慰めとしたいと思う。

賢順さんを偲ぶ

佐藤密雄

（一）

佐藤賢順さんがなくなった。夫人御同伴で関西へ、春の京都奈良を訪ねるとのことであった。昨秋も私共と一緒に知恩院で行われた浄土教学大会に出席されたが、帰途は一人で奈良に遊ばれた。一昨年ギリシャやイタリーの古跡を見て帰られてから一層日本の古典美を見直して御出でのようであったが、その楽しい古都への旅路の途中で、御祝いに立寄られた愛知県の刈谷の御寺で急死された。寔に唐突のことで私共にはしばらくは信じ難いことであった。

刈谷の御寺では、賢順さんの弟子分の方の晋山（しんざん）の御祝いと法然上人の七百五十年の遠忌（おんき）とが二日間にわって営まれたので、賢順さんの御出になったのは前日の晋山式の方であった。第二日の早朝に、法然上人の遠忌の法要が開白（かいびゃく）になるのを聞き乍ら発病されたのが午前七時半頃で、午前十時にこんすいに入られ、午後三時半に、遠忌の日中法要が終るころに息を引取られたという。

賢順さんは昭和十年に真野正順博士が法然上人鑽仰会を

創設された時に参画されて以来の鑽仰会の中心活動者であったし、雑誌浄土の維持者の一人であった。東海の旅先ではあったが、浄土宗の御寺で、五十年に一度の法然上人の遠忌の法要を聞き乍ら逝かれたのは、私共にはただの偶然と思えぬものがある。

刈谷の御寺の住職も賢順さんが弟子分として世話された方ときく。刈谷でなくなった遺体を、三重県の四日市から急報によって自動車でかけつけて夜を徹して東京へ運んだ飯田信弘君も賢順さんが世話をされた方である。学問上にも峰島・臼木・見田という大正大学の先生達がある。賢順さんの真実さは後進の面倒を見るにも遺憾なく発揮されていたが、それがよく実ってもいたといえる。

昭和四年から、真野正順博士を中心に土曜会が出来た。英独の宗教や仏教の研究書を読む会で、集ったものは賢順さんの外に故人では田中芳全・佐賀一海・大館信鏡・赤尾光雄・岡本貫瑩があり、現存するものに栗本俊道・静永孝英・佐藤良智・中村康隆と私がいるが、賢順さんは塾頭格をつとめた。リスデヴィッ夫人の仏教から始まってワレザー、シュラヘルマツハー、フォイエルバッハ等を次々と輪読したが、私共はドイツ語に弱くドイツ語原書は賢順さんがほとんど読んだといってよい。土曜会は太平洋戦争前に俊足相ついで逝ったのであるが、然し、生存の者達で太平洋戦後の浄土宗学界にその存在性を誇示し得たのは、その先頭に賢順さんがいたからであるといってよい。いま残った私共には荷が重い感じが切実である。

また太平洋戦争の初期に、賢順さんと作家の武田泰淳君と共に、願行寺や目黒長泉院で八宗綱要を読んだ。これは主として私が講義したが、その私が両者から種々の質問を受けて大いに啓発された。そして、その後であったか賢順さんが胸をいためて静養されることになり、私は賢順さんの名で大正大学予科の哲学概論を講じた。この時も、勉強させて頂き、爾来私は賢順さんの思考に関心を深めることが出来た。

浄土宗教学院が戦後、日本のすべての学界にさきがけて学術大会を持ったのは、真野正順博士の卓抜な見解と勇断によるものであったが、博士が病床につかれて以後の運営は賢順さんの働きであった。とくに、従来京都と東京でのみで開かれていたのを、仙台に進出して二日間の学術大会をなしたのは、賢順先生の努力によるものである。そのあとを受けた私は、名古屋で一度学術大会を開き得たが、そのほかはなかなか京都と東京以外に出ることが出来なかった。

（二）

一昨年私は賢順さんや竹中君等のきぴに付して欧洲を歩いた。第十一回の世界宗教史会議が、ドイツのマールブルグに開催されたのに出席したのである。日本代表のトップは三笠宮で、現地では在外の日本学者も加わって二十人に近いものとなったが、日本出発から会議後の二ケ月近い旅行を共にしたのは早稲田大学の仁戸田六三郎博士、駒沢大学の増永霊鳳博士、大正大学の竹中信常博士に賢順さんと私とでである。この旅行では税関でも旅行社でも賢順さんと私とを夫婦者扱いにした。ケイ・サトウとエム・サトウと並べて登録されている為めに、エム・サトウのエムをミセスと読むらしいのである。行きの飛行機でロンドンで降ろされ、ドイツ行きの飛行機に乗る迄に二時間程あるので、税関を出て休むことになった。賢順さんの次にミセスサトウとよぶので戸迷いしたが、結局私の間違いと判って、紳士国の税関吏でも笑うことのあることが解った。

マールブルグの一週間の研究発表は私は初日の二番目、賢順さん以下同行者が最前列で見護って下さった。賢順さんは三日目で、この日の司会者（チエアマン）はハンブルグ大学前総長のグンデルトさんで、かつて日本にも来たことがあり、渡辺海旭さんの家で若い日の賢順さんも面会したことのある方であった。研究発表された内容は浄土教の空論理（中論理）による解明であったが、これは賢順さんの学位論文にもなった論理である。これに対して司会者のグンデルトさんから、浄土を肯定する立場から解明するのか、否定する立場からするのかとの質問があり、これには前者であると答えられたが、賢順さんは、哲学の名門マールブルグ大学で開かれた学術大会で、グンデルト博士の質問を得たことに非常な感激をされて、これでドイツへ来たかいがあったと喜ばれた。

学術大会後の一週間の見学旅行でも、賢順さんと私は夫婦者扱いされて、これはよかった。見学旅行は宗教遺跡のような古い教会か、特別な宗教施設のあるところを見るのであるから、そのような地方では全員収容のホテルはない。夫婦者と独身者と分けて宿泊させるのであるが、私共は夫婦者の班で、ホテルもよく食堂では夫人達が間違われた日本人夫妻を親切にして呉れるのである。マリアラーハという湖畔の修道院に行った時は、巡礼宿へ二人または三人ずつ分宿したが、その時は私共のところへ一行中の日本人紅一点である工藤嬢が配されて来た。恐らく唯一の日本の独身嬢であるから、日本人夫妻と同一宿舎なら大丈夫との旅行社の考え方であったろうし、工藤さんも「あなた方

と一緒で安心」ということであって、その時は賢順さんと共に私も紳士であった。

いま願行寺にスペインのトレドの裏町とイタリーのベニスのサンマルコ寺院前広場の写真が拡大して掲げてある。トレドはサラセンのヨーロッパ侵入の遺跡で、キリスト教の大寺院にその侵入時代の跡が見られるが、この写真の裏町で、私共は葬列を見た。小僧さんが十字架の棒をささげて先頭に立って、棺前に神父が、棺後に遺族親せきや町内の人らしいのが、如何にも田舎の老在郷軍人のような姿でつき従っていた。私共もその後をついて行くと教会に入り、二十分位で式を終ってまた出て行った。多分埋葬をしに行くのであろうが、この始終を見届けた賢順さんが「日本の田舎の野辺の送りと全く同じだ」といったが、それがとくに感慨がこもっていたようで、私は未だにその言葉の調子迄覚えている。

サンマルコの寺院は私と賢順さんとで行き、博物館を見、古い王宮の跡を見てから、ベニス土産を買うのに、この広場の周辺をショッピングした。手製のレース刺繍の店をのぞいていると、三十五六の女店主と思われるのが出て来て店内へ誘い入れられた。解りにくい英語であるが私共の片こと英語を巧みにキヤッチして呉れるので、話込む程ではないがよい気持で話をして、ついに二人ともレースのテーブル掛けを買わされた。買わないと男が下がるような気持になって、つまり余りよくわからない英語でまるめられて買ったのである。そこで、賢順さんは「君は最高のマーチヤントオブベニスだ」と英語で、三度も繰返されたが、彼女はこの大文学的皮肉を解ってか解らないでか、依然として愛嬌のこぼれるような顔付で僕等を送り出したものである。私共の負であった。そこで賢順さんは僕に「全くしゃくにさわる女だった」といわれた。でも、「日本へ帰ったら、このテーブル掛をかけて一杯やろう」と話合って宿へ向ったが、これは帰来後果せなかった。

(三)

賢順さんはヨーロッパの旅行中はたんねんにメモをつけていられた。料理屋のメニューから酒の名まで一々記帳されていたので、私の如きは写真機も持たなかったので、帰ったらそのメモを読ませて下さいといっていたのである。そこで、帰国してから、何か思出すことがあると賢順さんに聞くと、あれはどこで何を見た時と、正確に教えてもらえた。記憶もよいのに、たんねんにメモするところ、きちょうめんな性格をそのまま現わしていた。

旅行中、私はビールかウイスキーを飲んでついぞワイン

の味を解するに至らなかったが、賢順さんはこの点でも、たんねんであって、必ず訪れた土地ではその土地の酒の名をきき出して、その酒を注文して飲んでいた。我共の一行に酒仙の仁戸田博士がいられたが、博士も賢順さんの酒の味い方に感心して、酒飲みの上下は量の多少でなく、味うことの浅深にあるとして感歎した程である。

去る二月の末日に、欧洲旅行を共にした五人が集って飲み且つ語ったが、その時は賢順さんが一番元気であった。然し、昭和四十年にアメリカである第十二回宗教史会議へも出席しようと話合ったとき、四十年ではおそすぎるから、行くなら早く行きたいと述べられた。その時は何んとも思わなかったが、今から考えると何か先きを急ぐ気持があったのであろうか。

三月八日、私は佐藤良智、中村康隆、竹中信常、村瀬秀雄の諸君と共に賢順さんと伊豆山のさがみ屋で一泊会談した。雑誌浄土の今後の方針を確立する為めの会合であった。賢順さんはその日午後六時からの在家仏教の連続講座を終えて東京から来会されたので、午後十一時近くにさがみやへ到着された。在家仏教の講座は恐らく賢順さんの講義の最後のものであったと考えられるが、この夜の講義は入一法句についてであった。曇鸞大師の論註という書物を講義されたが、その書物の結論が入一法句で、この夜のテープレコードをきくと、賢順さんはこの言葉によってそれまでなした連続講義の全体をしめくくる話をされている。

入一法句とは、すべては真理の一語につきるということであり、「西方浄土はただ真理たるのみ」ということであるが、このことを説き終って賢順さんは、みずからを真理に帰せしめたのであるといえる。西方浄土でも、賢順さんはあの四角い顔で、手をうしろに組んで「エー」とやっているのかどうか、知りたいものである。

賢順先生

三年ほど前この「浄土」の後記に、先生の動向として「……大学では相も変らずカント哲学のゼミは人気のマト、寺に在っては日曜講演を開いて教化に余念なく、さらに最近では諸処方ボウに講演に出かけられる。先生の仏教に関するユニークな見解はとくにインテリに好評の由」とある。思えば、あの独特な話法それに西洋哲学的思弁で浄土宗をながめるあの方法は、学生を始め、聴衆を魅惑していた。しかし先生はもう逝くなられたが、この現世にはその精神は後学者に受けつがれている。われわれは先生の志をつぎ、浄仏国土成就衆生を実現すべく努力することが、唯一の報恩であろう。

（H・S）

父の思い出

三月二十八日の日記

佐藤成順

朝から快晴。朝食をすませて、間もなく、突然、「チチビヨウキ、スグコラレタシ」の電報を受けた。父は彼岸が終ると、あわたゞしく、夜行で刈谷のさる寺の晋山式に招かれていった。今しがた「今頃はもう行事も終って、予定通り京都に向っているだろう。春の京都はいゝだろうなあ！」など家では羨やましがって話していたところだった。

いらだつ心を抑えて、やっと刈谷の寺に着いた時は、すでにおそかった。二十分程前にことときれた父の顔は、一日も病床についていなかったためか、いまにもふと眠りからさめて、話しかけてきそうな平生と変らない静かなものだった。耳を寄せると、息する音が聞こえてきそうな気がしてならなかった。

亡き骸は、そのまま、百キロの道を母と私等子供に守られるようにして、やっとのことで自宅に安置することが出来た。父のとなりに兄弟達がかわるがわる同乗して、少しでもゆられないようにと気をくばりながら、ささえるようにしてきた八時間のドライブ、父が刈谷に向う夜の東海道のドきた姉、弟と私等の三組の子供夫婦、それに妹と、家族全員に見送られたまたま見送りに元気な様子。あるいは父が出発した時の最後の校正も終って、「今日、表紙の色も紙質も決めてきた。これで全部終った。あとは出版を待つばかりだ。」と言って、いかにもほっとした表情をしたときの様子。そういう生々とした姿の記憶と、今現に、つめたくなって私のとなりに横たわっている姿とが、私の頭の中に混然となって、ただ空しくから

故佐藤賢順先生略歴

明治三十二年八月		東京都港区芝西久保巴町に生る
同	四十五年三月	芝紫絵小学校卒業
大正	六年三月	芝中学校卒業
同	八年十二月	大本山増上寺において浄土宗伝宗伝戒を受く
同	九年三月	宗教大学宗教部修了
同	十四年三月	早稲田大学文学部哲学科西洋哲学専攻科卒業
同	十四年六月	願行寺住職を拝命
昭和	二年三月	早稲田大学大学院修了同年ボサンケット「論理学の本質」飜訳出版
同	五年四月	大正大学講師就任
同	十年四月	法然上人鑽仰会創設に参画し爾来宗教運動に専心す
同	十二年	「リツケルトの哲学」(「現代哲学十二講」収載)
同	十五年二月	大正大学教授就任
同	十八年	「空の世界」(「世界観

まわりするばかりで、悲しいとか、困ったとかいうことを感じとる感覚さえも麻痺していた。

父の最期の様子が、とくに言い遺した言葉が、無性に気がかりとなって、何度も母に訊ねてみたが、答えは同じだった。父は最初軽い脳出血を起こして、三十分たらずで、昏睡状態に落ち入った。意識を失う寸前に、何度か繰り返し「南無阿弥陀仏」とかすかに唱えただけで、それ以来ただ静かに目をとじたまま、つきそう母に脈搏をとられながら、およそ六時間後には如来のふところに帰っていったのだった。いかにも浄土教の信仰に生きた父らしい最期であったかもしれない。「ものみなうつりゆくもの」理窟としては知っていた。「諸行無常、諸法無我、」修辞的にも名句であるには違いない。しかしながら、ただそれだけでは、たまらなく寂しい。とにかく、父は自分の予定した仕事は一応かたずけて、すべてに満足しきって如来の懐に帰っていったのだ、とこう信ずることが死者への最善の供養であろう。またこう考えて自分自身と妥協しようとは勉めている。

父の洋服のポケットから小さな一冊の日記帳が出てきた。父は生前常時この日記帳を携帯して、毎日その日の出来ごとを丹念に記録していた。

『二月十六日、晴、朝の新聞で星野俊英教授の死を知り驚く。……』(原文のまま、以下いずれも原文のまま)。また『二月二十一日朝くもりのち晴、……鎌倉の行信君の子息(三才)が急死した、各方面に通知す。……』とメモされている筆の跡もなまなましい。日記の主は、このメモを自分には次元の違う出来ごととして、あるいは記していたかもしれない。しかしその日記の主もつかのまに今同じ道をたどっていった。日記は死の前日迄続いている。『三月二十七日、晴、時々くもり、久々の晴、漸く暖かくなる。昨夜一時すぎ目がさめたが、五時ごろからトロトロする。朝食後、蒲郡ホテルの方を散歩、竹島弁天へ詣ず、昼すぎ誓満寺へ』。母とつれだって蒲郡海岸に一日をくつろいだ時の様子は後から聞く事が出来た。そのときは何の変調もなかったのだが。父の日記は二十七日でぷっつりと終っていた。

	の哲学」収載)
同	二十一年九月　大正大学仏教科長就任
同	二十二年四月　NHKより第一回の放送をなし以後ラジオ放送六十余回
同	二十三年四月　大正大学哲学研究室主任就任
同	二十六年三月　大正大学文学部長就任
	同年四月権僧正(僧階)に叙せらる
同	二十六年九月　浄土宗教学院理事就任
同	三十二年五月　高崎経済大学教授兼任
同	三十三年　「浄土教の本質」(「講座仏教」第二巻)
同	三十五年二月　文学博士
同	三十五年九月　第十回国際宗教学会(ドイツ、マールブルク)に日本代表として出席　のち欧州各国を視察
同	三十七年三月　「宗教の論理と表現」出版、その他、浄土教、宗教哲学に関する論文数十編
同	三十七年三月　寂、行年六十二才
同	三十七年四月　生前の宗門に対する功労により浄土宗より正僧正を贈らる

加藤鏡心

大橋俊雄

はてしなくつづく濃尾平野の一角、海部郡神島田村中一色は関通上人ゆかりの地であり、円成律寺を中心に仏法の盛んな信仰心のあつい土地である。「一人出家すれば九族天にのぼる」といい、出家者を出すことを寧ろ幸福と考え、一門の栄誉とした土地の風習は今も尚つづけられている。ここに鏡心が生れたのは慶応三年十一月のことであり、父は熊沢慶三郎。その三男として生れたのが鏡心であり、彼には兄弟が四人居り、長兄の久吉が父のあとをついで農業をこととした。年十三の時名古屋道下町の光明寺に入り、伊藤鏡学の門をたたき得度をうけた。名を鏡心と改めたのは此時であったが、幼名は知ることができない。

長ずるに及んで一時京都にのぼり知恩院山内の浄土宗学林に入り二課の業を終え、更に東京にもしばらくの間遊学したこともあったが、辞して故山に帰ってより後は唯ひたすら鏡学の膝下にあって解行の二修につとめ、二十四年十二月鉄砲町の伝光院を董し、在山中本堂再建の業をとげ、四十年九月師籍光明寺に転じた。彼は夏冬をとはず四時には仏前の人となって勤行かかすことなく、昭和六年七月執事長となって祖山知恩院に出仕されてからは、毎朝三時には起床し勤行に出られる時間をまたれたというほどの熱烈な護法の念つよい僧であった。三時起床は律制によって定められた時間で、戒律を厳守した彼にとっては当然なことであったろう。

彼が浄華院に出られた頃、即ち岩井智海が浄華院から増上寺に転昇した昭和九年三月から六月にかけての宗門は、正月に増上寺法主道重信教が示寂し、四月には山下現有が浄土に帰られ、つづいて百万遍の林彦明は辞して日華仏教の提携を忘し、又黒谷の炎上がある等混屯としていた。時に本山に出ようとする自薦他薦の人がいたことはいうまでもない。杉山大運や桑門秀我が再三のすすめにも拘らず辞して動かなったのも此頃であった。然しそれらの人をさしおき鏡心が教区や法縁の人たちに推されて本山に入った経緯の中には、当時推薦する人々の側に、「おがめられる人」をえらびたいという心情のあったことに一因があった。言はば徳者としての彼を、彼の日常を知る人たちによって認められたからに外ならなかった。「おがめられる人」のなかに彼の存在したことは幸せであった。彼が中一色の円成律寺に住したのも、又出でて知恩院執

事長になったのも深く私淑する山下大僧正の前住地であり、又大僧正に常随給仕できるという心情もあったからで、彼は現有の寂後「孝誉現有大僧正」一巻を編纂して、其の高徳を偲んだ。ここにもその心念のあらわれをよみとることができるであろう。

又彼は温厚篤実、常に柔和をもって人に接し、人と争うというが如きことは決してなさらなかった。それについて次のような慈愛にこもるエピソードがのこされている。昭和十年四月彼は光明寺を愛弟子にゆずった。その年の十二月、松坂屋の先代伊藤次郎左衛門守松の母堂が逝去し、新住は早速霊前にぬかずき、位牌に筆をとった。母堂は信心のあつい人で、曽って光明寺の五重会で「覚誉妙寿」とつけられ、西山派西光院の五重会では「松空」と法名をいただき、このことは既に伊藤家の人たちは誰でも、番頭に至るまで記憶されているもので誰一人知らぬものはない。従って戒名は「覚誉松空妙寿」とつけるべきであった。所が知らぬは新住ばかりで、彼は法名を間違え「覚誉松室妙寿」とつけ、すらすらと位牌に清書し開眼の式を終った。かくて控室に入るや塔頭願故院和尚は顔色をかえ「戒名が間違っています」という。しかし既にすべてを終った今となっては致し方がない。ただ処分を待つばかりである。

殆なくして幸か不幸か鏡心は車をはしらせお悔みに参られ、読経回願がすみ控室に入られるや、性来癇癪もちの守松は顔面の神経をとがらせて、「空がよいか室がよいか」とつめよった。全てに闘争的で短気であった守松に配するに、温厚静かに物語る鏡心のとり合せは対比的であり、印象的で、時に鏡心は「空を室と無断で書きかえたところは流石新命はえらい、このようなことは誰にもできることではない。学者らしく、又大胆である。伊藤さん良く考えてみてごらんなさい。松空とは松がからつぼということではありません か。松に虫がついて枯れ、切りたおされてからっぽになったと見るほかはないでしょう。松が枯れては妙寿の字が死んでしまう。松は栄えてこそ寿命があり、ことぶきがあるのです。御室の庭に松がなお栄えしげってこそことぶきがある。妙寿とある以上、松空ではいけない。松室妙寿立派な戒名じや。松室ではいけない。松室とすべきが正鵠を得ている所以を諄々と述べられた。これは一に鏡心の奇智であったにしても、人をきずつけない、争いごとを決して好まれなかった彼にして始めて出来ることであるにしても、このことについては終生口外されなかったという。もって謙譲と其の慈愛の深きさまを知ることができよう。

本山法主として浄華院に上山したのは六十八歳、昭和十二年三月には大僧正に、翌十三年には准司教に進叙されたが、ここに入ってからの彼は別にとりたてて後世にのこさるべき仕事はなされていない。強いていえば持戒厳に、念仏称名のあけくれといった方が適切のようで、これといった趣味ももたなかったが、晩年には閑暇を得て当時浄華院の阿弥陀堂に止宿していた漢学の先生について漢詩の詩作にたしなまれ、添削を受けていた。

かくて宗門を思う熱情深かりし彼も、病魔には抗すべくもなく、十六年十月二日七十五才を以て安養の浄土に帰られた。

法名を清蓮社浄誉上人大阿光明鏡心大和尚という。

悲

石上善応

最近、わたくしの周辺で、尊い生命を失い、浄土へ先立った人びとが実に数多い。友人の敬愛せる慈父や愛児があいついで亡くなっている。残されたものにとって、その歎き悲しみは「ご愁傷さま」の一ことですまされるものではない。

昨年の秋のことであった。京都に行くための準備をしているところへ、一通の黒わくのはがきがついた。手に取って唖然とするのみであった。そこには一友人の次女の死がつめたく記されていた。あんなに子煩悩な友人であったのに、わたくしたちの会合にもよく連れてきていたのに、いったいどうしたことなのだろうか。十日ほどまえには別にそんな話も聞かなかったが、とあれこれ勝手に思案したものである。しかし、どうしても京都に発たねばならない。お葬式に参列するわけにも行かず、旅行の荷物を抱えて、なにはともあれと友人宅へ馳けつけたのである。馳けつけたからといって、友人の悲しみがへりもしまい。愛児の命がもどりもしまい。ただ、ひとの悲しみを自分の悲しみとして受けとって、その悲歎をわかちあおうと思ったのにすぎなかったからである。

三十五日を迎えて、友人ら三名で再びお焼香におもむいた。読経もすんで、すぎこしかたのほとけの思い出を語り合った。満四才の誕生を目前にして、二日たらずの病臥で三人の医師の努力のかいもなく急逝した当時の模様などを。わたくしが馳けつけた時、寝棺の中で眠っているかのように可愛い顔をしていたことなども。その時、友人は次のような話をした。子を失うことが親にとってどんなに悲しいことか。だが、子の死が親を悲しませるなら死んだ子は親不幸ということになろう。それでは死んだ子が可哀そうだ。あんなに可愛く、ききわけのあった子を親不幸呼ばわりさせたくない。一度は親と呼ばれた幸福を身にしみて感じているからには、いたずらに悲しまず、明るい日々をすごすことこそ、亡き娘の冥福を祈る最上の方法ではないだろうか。そう思ったとたんに、まる一日も悲しんだり苦しんでいた気持ちがうすらぎ、悲しみがどこかに消え去ってしまった。仏教を研究していても入りえなかった信仰の世界、頭だけで理解していた釈尊のみ教えを、身をもって亡き娘が教えてくれたのだ……と。

このような話を聞いてまもなく、お礼の手紙が配達されてきた。生前のご厚誼を謝す云々と書かれた最後に友人の句が添えられてあった。

亡き吾子は　親を済度の　稚児菩薩

確かに親は子から日常生活の中でも教えられている。子の力によって親はより高められていっている。その子が死によって親を済度

したというのも実感であろう。友人はその後、このことをある仏教誌に書いて、先の句の後に、

弥陀のみもとで　ままごと遊ばん

とつけ足した。

二月の下旬、別の友人の長男が亡くなったという電話を受けた。「あのかわいい坊やがかい？」と、つい聞き返すほどにあまりにも突然な知らせであった。夕刻、うかがってただただ人間の生命のはかなさを、くりかえし充分に知らされたのである。感冒にかかったかと思う間もなく、数時間のうちに、いやむしろ突然に心臓の鼓動がとまったといった方がよいほどに、今の今まですこやかであった幼児の生命が一瞬にこの地上を飛び去ったのである。ふだんと変わらない顔つきで、しかも微笑すら浮かべて。特異体質であったともいうけれども、わたくしの眼から見ても、あんなにかわいい子であったのだから、両親や家族にしてみれば言語を絶していることだろう。お葬式の当日、いよいよ、これでお別れという時、流感で倒れて寝室にある友人の奥さんのところへ、寝棺を運ぶ友人のことばは「ママのところへお別れをしに行こうね」とさながら生ける人に対するそれであった。父親ならずしては言えない言葉である。あとで友人はいう。させたいと思っただけのことはさせてきた。そういう意味では思い残すことはない。今ごろ、浄土でわれわれのくるのを待っていることだろう。われわれ親に生命の大切さを教えてくれたんだと思っているのだけれど。みんなにかわいがってもらったので、幸せな子だった、というような話をした。この亡き坊やの三十五日の日、まったく偶然にも佐藤賢順先生の訃報に接したのである。

わたくしたちは、このような訃報に接すると、まったく愕然とする。身の廻りに不幸が連続すると今度は自分ではないかと考えつつも、その底には自分を例外としてみる癖がひそんでいる。新聞にでる多くの事故死も、馬耳東風である。そこには、むしろ、毎日の生活のなかで、自己の生命を大切にしていない一面があるからであろう。生命の尊さを知ることこそ、亡き人への最善の供養であるはずである。わたくしたちは親しき人の死に接すると歎き悲しまずにはおられない。人間であれば当然、悲しい時、嬉しい時にその感情を

童心仏心　シャボン玉

鎖につながれた犬の前で、子どもがシャボン玉を吹いた。小さな光の玉は、犬の鼻先に無数に散った。犬は、鎖いっぱいに体を動かし、口を大きく開き、歯をカクッ、カクッと噛みならして、光の玉をたべた。いくつも、いくつも。

「ばかな犬だ。腹のたしにならないシャボン玉をたべるなんて。シャボン玉なんかに、びくびくすることはないんだ。度胸のない犬だ。」軒端で、雀が犬のようすをおかしがって、チチチチと笑った。

犬に気をとられている雀のわきを、ひときわ大きなシャボン玉が、ふわふわと通った。

「うへっ。」

雀は、これを見ると、胸をドキンとさせてパッと飛び立った。

大きなシャボン玉は、雀の影を映して、だまって、ゆらゆら空へ昇っていった。（桐）

示すものである。歎かない方がどうかしている。慟哭する人もいるだろう。声なき声をたてる人もいるだろう。涙ぐむ人もいるだろう。人間としてあたりまえの行為である。その時の、そのような悲しみや慟哭が、実はわたくしたちにとって非常に大切なものである。このような感情をぬきにして仏教をつかむことは確かにむずかしいからでもある。

維摩経・弟子品のなかに「煩悩を断ぜずして涅槃に入る。これを宴坐と為す。」

と説かれている。毎日の生活につきものの人間の感情や迷いの渦中で、心の自由や平安を求めるべきである。親しき人の死に直面して、わたくしたちが悲しむのも当然のことで、その悲しみの体験が人間を深く成長させている。二友人のことばのなかに、それがうかがえる。わが子の死に直面して、ほんとうに生命の大切さを、あるいはほんとうに仏教を知ったという仏教者が数多い。それだけに深刻な強い転機をまねいている。わが子は死んだのではなく、永遠に親の胸中に生き続けている。友人の愛児の死がわたくしにまで影響を及ぼし、強い反省を与えてくれた。いいかえれば、わたくしのなかにも生き続けている。まさしく、幼な子はほさつなのである。そのほさつに感謝の気持ちで合掌しなくてはならない。これこそ、仏の慈悲というものである。

慈悲ということばは、元来、別々のことばで、原語ではマイトリー（慈）、カルナー（悲）という。わたくしはこの〈悲〉を常日頃から興味深く見つめている。というのも、漢訳で慈悲とある大乗経典の原本の多くが、〈カルナー〉のみだからである。そこでは大乗仏教が〈悲〉をとくに重要視してきたことが知られるわけでもある。古来、慈悲についても当然のことで、いろいろの解釈がなされているが、それはさておき、バーリ文によれば「カルナーとは他人が苦しんでいるときによき人が心をおののかせること」であり、「他人の苦しみに堪えられない気持ち」のことでもあるとしている。この考えは原意をよく言いあてている。カルナーの原意は「嘆き悲しむ」ことであり、とくに死に接して悲しむ意味あいが強いものであった。それが同情や、哀憐の意味に変わったものと考えてよい。

子供がいたずらをしている。その時、母親が、自分も小さい時、同じことをしてきたのだから叱るわけにはいかないと言っていたらどんなことになるだろう。花一本とった子がよその家のたんせいした花をとるに至っては、ことは面倒となる。子供のなにげない行為を、あまやかした育てかたをするからだと、舅や姑にいわれた時の母親。お爺さんが大切にしていた菊の花をへし折った子供とお爺さんの間に入って、泣く泣く叱らねばならない母親。この時の親の気持ちはまさにつらい、悲しい、声にならない嘆きをこめている。夜暗い玄関の外に、いたずらした子をほうり出した親が、玄関の内側でどうしているだろうと案じている姿、ここには、自分の体験を通した、悲痛なまでの感情が織りなされている。どうか、すこやかに育ってくれよという気持ちとともに。

このようなたとえのなかに含まれている〈悲〉の精神は、自分が身をもって体得した苦痛なまでの日常生活のなかではぐくまれてくる。いうにいわれないほさつ像の微笑は泣いているような、怒っているような、さびしげ

な、しかも、なんとなく微笑している。そういうお顔である。その微笑のありかたを母親の子に対する現われに比してもよかろう。時にはやさしく、時にはつめたく突き放すことも大切であるが、それもへ悲Vのあらわれといってよい。大悲ということばのもち味は考える以上に深いものがある。

今はなきいとし子が親や、わたくしたちに仏の精神を教えてくれたからには、すでにその幼な子は仏の教えを伝える先達となっている。そればかりではない。死んだ筈の幼児の生命は脈々とわたくしたちに連がっていることに気づくのである。死んだというよりも生き続けているといった方がよい。このようなあらわれは、ある意味で還相の姿に連がるものである。この世の中は相対的なものである。悲しみのうしろに喜びが秘められている。苦しみを知るから楽しみがほんものになる。わたくしたちは、周囲に起こる悲しみを悲しみとして感じつつ、そこで知らされた人間の真実を喜びとして受けとるように努力すべきであろう。それこそ、亡き人々への最善の供養であるはずである。

ものを大切に

勤め励んで折角得た富であるから、これは自分だけのものであると、考えるとつい自分一人のためにだけ費してしまう。しかしそれは誤りで、得た富の幾分かは他人のためにしその幾分かは積んでおき、不時の用にそなえまた広く社会のために、更に教えのために用いられることを喜ばねばならぬ。

どんなものでも一つとして「わがもの」はない。すべてのものは、ただ因縁によって、自分のところにきたものであり、しばらく預っているだけにすぎない。それ故に、一つのものでも、大切にして粗末にすることがあってはならない。

阿難が優顕王の妃、娑摩婆帝から五百領の衣を供養せられたが、その時阿難は快よく受いれた。王はこのことを聞いて、あるいは阿難が普通の人のように、貪りの心がおきて、平気でこれを受けたのでないかと疑った。王は阿難を訪れ次の問答をかさねた。

「尊者は五百領の衣を一度に受けて、どうされるつもりですか」

「大王よ、私の同門の人々の中には、破れた衣を着ている者が多い。私はその人たちに分ちます」

「尊者よ、その不用になった破れ衣は、どうされますか」

「大王よ、破れた衣で敷布を作ります」

「尊者よ、その古い敷布はどうされます」

「大王よ、それで枕のふくろを作ります」

「尊者よ、その古い枕のふくろは……」

「大王よ、それを敷物に使います」

「尊者よ、古い敷物は……」

「大王よ、それで足拭を作ります」

「尊者よ、古い足拭は……」

「大王よ、それを雑巾にします」

「尊者よ、その古い雑巾は……」

「大王よ、私どもはその雑巾を細々に裂き、泥に合せて、家を造るときに壁の中に入れて用います」

ものは大切に使わねばならない。しかも生かして使わねばならない。これが「わがもの」でない、預り物の使い方である。

ラーゲルの思い出　第十一話　（完）

実話　彷徨する子供

吉野翠幹

かって編集子から何か間合せ原稿をとの依頼を受けて、とっさに送ったのが「割腹の前後」であった。これが機縁となって引続き執筆することになったのがラーゲルの思い出話であった。同じく連載できるものなら、初めから想を練って順序よく執筆すべきであり、もうそうすれば上手下手は別として、まだしも申訳のたつ仕儀となったであろう。それなのに思いつきのまま雑駁なことばかりを記したので、何んとも赤面している次第である。こうしている内に前回の話が、私が待望の舞鶴上陸というところまできてしまったので、当然この思い出話はそこで終っていたわけである。

ここで一言申上げたいことは、この思い出話は目に見えぬものに追いかけられて筆をとったということである。従ってラーゲルの思い出話を執筆していると、いつも私の目の前には、異国で倒れた友だちの顔が現われ、彼等の目が机の上をのぞき込んでいるように思われてならなかった。それだけに嘘はつけないし、また誇張することもしなかった。できるだけ事実を内輪に述べてきたつもりである。この友だちの中には、ソ連兵に誤って射たれ私の膝の上で息をひきとった兵士があった。栄養失調ですっかり青ぶくれ、段々と心臓が弱って死んだ兵士があった。掘さつ機のワイヤーが切れて、下で作業していた兵士がアッという間に大地につぶされ、身体はひきがえるのように、顔は煎餅のように平たくなってしまったことがあった。

「割腹の前後」に記した安藤健生曹長の死はたしかに特異な事件であった。彼は鬼をも四百平方米位の土地があった。最初の犠牲者が出たときに、ここに埋められたので、この土地が私たちのために用意された墓地であったことを知った。ソ連はすべて計画的に行うところであるから、墓地の広さを目測しながら、私たちは何んともいえぬ奇妙な気持になった。しかし結局のところソ連の計画は的中したのであった。何故なら私たちがいよいよ帰還できる頃になると、この墓地が戦友で満員になったからである。墓地とはいいながら単に鉄条網で囲ってあるだけのことであり、知らぬ人には何んな所か判る筈もなく、恐らく永久に訪れる人もなく、まして線香一本あげてくれる人はないと思う。

ラーゲルに隣り合せて鉄条網で囲まれた約

拉ぐであろうと思われる堂々たる体軀の持主であり、明朗闊達なる好青年であった。彼は長年の軍隊生活で鍛え上げてきただけあって、動作は常にきびきびしていたし、責任感が重くどんな困難な事態に出あっても率先ことに当っていた。彼の下についた衛生兵や補助兵は彼を畏敬して気持よく働いていた。彼は軍医の片腕というばかりでなく、誰からも頼もしく思われ、一同の敬虔を集めていた。

この安藤が人の出入りの絶えない医務室において、しかも白昼突如として割腹してしまった。同じ自殺をはかるならもっと有効な方法があろうに、何故最も苦痛が激しく、そして効果の少ない割腹を選んだのか、割腹の途中で同僚に発見され、直ちに応急手当が施されたのに、遂に出血多量で即死してしまった。これ程思い切り自腹を切り割いた位に、彼は何を激しく思いつめていたのか。

長年彼と一緒に暮してきた者たちですら、彼の自殺の動機も判らず、彼を苦悩させていた原因を知らなかった。不思議といえば不思議な事件であった。しかし若し私の想像が許されるならば、その当時のラーゲル管理が軽症患者にも容赦なく強制労働を課していたこと、ソ連軍医の勝手すぎる医務室管理があったことと思い合せて、彼は死の抗議を行ったのではあるまいか。

割腹という異常手段をとったことにも何か意味があったように思われる。かって日本歌舞伎の名優たちがソ連に渡って、忠臣蔵を上演したことがあった。それ以来、ソ連人は割腹を畏怖するというよりも、最も野蛮な行為であり、言語に絶する愚劣行為と思うようになった。例えばソ連人が相手を思いきり罵倒する場合に、最下級の罵言として「サムライ」「ハラキリ」という日本語を使用していたことでもわかった。安藤はそのハラキリをあえて実行したのであった。

「割腹の前後」は私にとって安藤があわれで仕方がないので、事実のままを記したのであった。ついでといっては申訳ないが、私たちがまだ朝鮮に抑留されていた頃に、子供を拾ったことがあるので最後にその話を紹介させて頂きたい。

北朝鮮の冬の寒さは、大体南樺太と同じ位なので仲々に酷しい。溝や川は凍ってしまい地上に水気というものがなくなってしまう。こんな冬の最中であったが、ソ連の計いで一軒の銭湯を借りきって、私たちを入浴させてくれたことがあった。いかにも銭湯の湯舟でもこちらは何千人という大世帯であるから、全部が一通り入浴をすませるのにも日数がかかった。結局私たちは前後二回しか入浴できなかったが、半年ぶりで入浴するのであるから、内地で温泉旅行に出かけるよりはるかに楽しいことであった。

私たちは入浴をすませ、誰もが上気した顔をして銭湯の前に整列した。すると先刻から雪のちらつく屋外で、順番を待っていた一団が、私たちと交替で銭湯に入って行った。私たちが帰ろうとする時に、後尾の兵士たちは横丁に一人の子供が震えて立っているのに気がついた。その子供は十才前後の男の子で、ボロボロの着物からは腕があらわに見えていた。しかも雪の上に素足でいたので、震えていたのも当然のことであった。このあわれな姿を見た兵士たちは、たとえ同じ年頃の自分たちの子供のことを思い出すまでもなく、凍死寸前の子供であったから、誰いうとなく子

供を連れて宿舎に帰った。ソ連の衛兵をどうごまかしたのか、または衛兵が黙許してくれたのか、何れにしても私たちの宿舎に子供一人同居することになった。

軍隊のありがたい点は人手が揃っていることである。誰から命ぜられるまでもなく、ある者は直ちに湯をわかした。ある者は同僚を回って衣類を集めてきた。ある者は苦心して食物を探してきた。そしてある者は衣服を子供向きに改良した。兵士たちは熱心に愛情をこめて子供の世話をしてやった。子供はまっ黒に垢で埋っていたが、更に兵士たちを驚かせたことは身体中が虱の巣になっていたことであった。また子供の手や足はかなり重い凍症にかかっていたので、この方の手当もしてやった。こうして身体の処置を終り、衣服を着せてみると、子供の顔だちもよく可愛いらしい子供になった。

さて、と兵士たちはかわるがわる子供に質問をしてみた。しかし子供は一言も口をきかなかった。唖でないことは確かだが、黙ったまま時々思い出したように震えるばかりであった。手足の傷が痛むかも知れないが、それより余程恐ろしいものに追いかけられでもするように怯えている様子であった。とにかく夜になって子供は兵士たちの間に挟って寝た。すると兵士は子供がすごい寝小便をしたので驚かされた。しかし兵士たちは決して叱らず、やさしく衣服をとりかえてやってまた一緒に寝た。この寝小便は毎晩やられるのであるから、軍民一体の抗戦がいかに必死に行われたかが想像できた。しかし二度目の攻撃に対してソ連軍を防げるものでなかった。たちまちにして羅津は占領された。この戦いに加っていた俊雄の父も戦死した。

俊雄は母と手をとり合って、羅津から清津を抜け、東海岸に沿い城津に向けて夢中で逃げた。路上は避難する人々で混雑を極めた。砲銃撃の音が聞えなくなっても、ソ連軍がすぐ後に迫っているようで、人々は日夜を分たず足の続く限り逃げのびた。この混乱の中で母と二人で逃げる俊雄はこの世の地獄の苦しさを味った。朝鮮の人たちは打って変って冷淡であった。二百粁以上に及ぶ道を、露をしのぐ所とてなく、何を食べたか食べなかったか判らぬが、一時も猶予がならず歩きに歩い

羅津と清津に各一個小隊位がいたに過ぎなかった。例によって土地の男たちによって自衛軍が組織されていたが、それも銃は殆んどなく多くは竹槍であった。これではソ連の上陸作戦に対して非力であるのも当然であった。それにも拘らず猛砲撃下に進撃してきたソ連兵を一度は撃退し、洋上に退却させたのであるから、軍民一体の抗戦がいかに必死に行われたかが想像できた。しかし二度目の攻撃に対してソ連軍を防げるものでなかった。たちまちにして羅津は占領された。この戦いに加っていた俊雄の父も戦死した。

俊雄は母と手をとり合って、羅津から清津を抜け、東海岸に沿い城津に向けて夢中で逃げた。路上は避難する人々で混雑を極めた。砲銃撃の音が聞えなくなっても、ソ連軍がすぐ後に迫っているようで、人々は日夜を分たず足の続く限り逃げのびた。この混乱の中で母と二人で逃げる俊雄はこの世の地獄の苦しさを味った。朝鮮の人たちは打って変って冷淡であった。二百粁以上に及ぶ道を、露をしのぐ所とてなく、何を食べたか食べなかったか判らぬが、一時も猶予がならず歩きに歩い

た。

やっと城津に近づいた頃には、普段から病身であった母親の足は、もう一歩も先きに進めなくなった。幸いガランとした倉庫のような空家をみつけ、その中に入った。そこで横になった母親は、一度に疲れが出たのか身体も動かせない病人となった。俊雄は昼間は、そこらを彷徨して食べ物を求めた。残飯すらも容易に手に入らなかった。台所から野良犬のように追い払われたことも多かった。こんな時には、両親の慈愛を一身に受けて育ってきた俊雄には、力の及ばないことが多かった。

僅かでも食べ物が手に入れば、直ちに倉庫に帰って母親と二人で喰べた。しかし二人ともに空腹に耐えながら抱き合って夜を明かしたことも多かった。倉庫に住んで十日もすると、母親の病勢がつのり、遂に帰らぬ旅路にたってしまった。母親に死なれて、俊雄は呆然自失、何をしてよいか判らなかった。俊雄はそのまま母の側で一日を過した。

そして翌日、俊雄が目をさましてみると、昨夜まで母親の枕もとに確かにあった風呂敷包みが失くなっていた。俊雄はその包みの中に何が入っていたのか少しも知らなかった。ただ家を出てからここに来るまで母親が大切に持ち歩いてきたものであった。ここで寝つくまでも母親がいつも風呂敷包みに注意をしてから母親がいつも風呂敷包みに注意を払っていた。俊雄は盗まれた包みが欲しいとは思わなかったが、母親が大切にしていたものを持ち去られたのが悲しかった。

その日は腹が減っても、食べ物を探しにゆく気になれなかった。今にも降り出しそうな天気のために、暗い倉庫の中はジメジメしていた。その内に俊雄は、こうして母親の側にいることが恐ろしくなってきた。一度恐いと思うと、いても立ってもいられない気持になった。俊雄はフラリ立ち上って、母親の屍をひとり残して倉庫を出た。いつ降り出したのか、シトシトと降る雨の中を、昨日から何も口にしない空腹をかかえて、俊雄は南の方に向って歩いて行った。

俊雄はそれからどこをどう歩いたのか、とにかく城津から更に二百粁離れた興南にたどりついた頃には、北鮮は寒さの酷しい冬になっていた。凍てついた大地を素足で歩き、手も足も凍症にかかってしまった。こんな時に、銭湯帰りの私たち一団の目に俊雄の姿がとまったわけであった。

子供の生命力は実に偉大であると思った。もとから強健でない俊雄が、冷笑と白眼に送り迎えされ、それみよがしに追い回され、よくここまで生き抜いてきたものであった。兵士たちの熱意と温情のおかげで、俊雄に漸く人心地がもどってきた。俊雄は日増しに愛らしい子供になり、やがて子供らしい悪戯をするようになって兵士たちを喜ばせた。俊雄は私たちの中隊のマスコットとなったのも当然であった。

やがて酷寒の冬も終り、春もすぎた。その頃再び内地帰還の噂でもちきりとなった。かつてソ連の収容所長が明日は船がくる、明後日は船が来ると毎日約束していたのとは違って、興南の港には、船倉に棚を設けた貨物船が事実入港したのであった。船がきた以上は今度の帰還は目の前にあった。私たちはいつ出発命令があってもよいように宿舎の隅から隅まで、塵一つ残さぬように清掃を行った。器物もきれいにして整頓しておいた。

まちにまった出発の日となった。雲一つない初夏の陽を浴びて、私たちは隊伍を整えた。服装こそ汚れ傷んでいたが、私たちの気持だけは威風堂々晴れがましいものであった。私は久し振りに軍刀を腰につけて中隊の先頭に立った。

剣には黄菊はそえて佩き給え

これは故吉田絃二郎師が私の軍刀に餞として送ってくれた句であった。

ソ連将校がかわるがわる来「お目でとう」と私たちの前途を祝してくれた。俊雄はこの日のために兵士たちが丹精こめて用意した衣服を着ていた。俊雄の祖父母が新潟にいる筈だというので、兵士たちは早く祖父母に逢わせたいと自分のことのように楽しんでいた。

興南の港は、硫安工場が自分の会社のためにつくった港であるから、当然会社の内にあった。そこにはソ連の七千トン級の船が横付となっていた。やがて全員の乗船が終る頃に二人の兵士がきて、俊雄が乗船できないと私に報告した。それによれば、日本軍だけを乗せる船に子供を一緒に乗せることは、ソ連の責任上できないということであった。そのかわり収容所長が、俊雄は次の便船で必ず新潟に帰すから心配はないと約束してくれたとのことであった。

私は急いで甲板に出た。するとすぐ目の前に、俊雄がソ連将校の手に抱かれて、しきりと手を振っていた。

夕暮れ頃になって船は港を出た。やがて俊雄の姿が見えなくなってから、俊雄がどうなったか私は知らない。果して俊雄は新潟に帰れたか、それとも再び北鮮の街を彷徨して食べ物を探して回ったか。私たちの船は、予想に反し、約束が破られて船はナホトカに向け一路北に舵をとって航海を続けた。船上で私は俊雄の将来に疑問を持たざるを得なかった

船は北鮮の陸地に近くを航行した。船のけたてる波に夜光虫が美しく光っていた。陸地の山々は夕暗につつまれて次第に見えなくなった。あの山の奥には俊雄のような子供たちが何人、いや何千人いることかと思うと悲しかった。（完）

子は親の幸福

諺の中には正反対の諺がいくらもある。例えば「親の光は七光り」というかと思えば、「親はなくても子は育つ」というが如くである。同じ親であっても、子供にしてみると母の方が有難いようである。戦場で死ぬ場合にはよく「お母さん」と呼ぶ者があった。そのくせ子供にとってほんとに役に立つのは父親であるのに、平常の父親は時計の振子のようだけで、余り有難がられていない。六月十七日が「父の日」であるからといっても、「父の日なんてあったのかい」と軽く扱われる位のものである。

しかし一度親を亡くすと、初めて親の有難みが判ってくる。孝行したい時には親はなしというのも、昔からの実感なのであろう。もっとも近頃は親が子供の世話をするのは当然の義務であり、孝行などと特にいう必要はないということらしいので、今の人の実感にならぬ諺かも知れない。

それはさておき、子供の生命力は偉大であり、そこには奥深い神秘すら感ずる。これは生長する力に外ならないが、そのおかげで親の幸福もあり得るのだろう。親は子供の有難さをもっと感謝すべきかも知れぬ。

扉の御法語

もし憍慢の心だにもおこりなば、たちどころに阿弥陀ほとけの願にはそむきぬるものなれば、弥陀も諸仏も護念し給はずなりぬれば、悪魔のためにもなやまさる也。かへすかへすも憍慢の心をおこすべからず。

（念仏行者訓条）

上人は「くれぐれも憍慢の心をおこしてはいけない」と申されました。ここにくれぐれもと念を押された点に注意しなければなりません。何故なら憍慢の心を起せば、たちどころに阿弥陀さまの本願にそむくことになるといわれているからです。

憍も慢もおごる心であり、あなどり軽んずる心であります。相手を軽んずるということは、自分が優れていると思うからです。こうした心は本願にそむき、諸仏から見放され、悪魔のためになやまされることになると申されています。何がいけないといって、上人からこれ程強くいわれ、私どもとして絶対避けねばならぬことが外にあるでしょうか。十悪といえど念仏によって救われます。本願にそむく憍慢は罪悪というより、もっと基本的悪であるといわねばなりません。

この御法語における憍慢は、実は「われこそは第一番の念仏者だ」と思う心を意味しています。つまりこの御法語は「もっともらしく念仏を行じ、もっともらしい恰好をしている人」に対する御注意の中にあるお詞で、自分の四囲の人々を眺めて、彼もいけない、誰も駄目だと軽んじ、やっぱり自分ほどの念仏者は外にあるまいと思うようになった人、かかる人は憍慢の徒であると申されたのです。これは日日愚にかえることであります。そして憍慢の者は、その心が障りとなって、決して往生できないのだといわれました。

「われほどの念仏者よもあらじと思うは、ひが事也」と、自分で自分に満足する者は、それ以上の人の多くあることを知らぬ証こであるとされています。このように念仏者に憍慢の心の生ずることを戒しめられましたが、上人のお言葉はいかなる場合にも憍慢の心を起すなといわれたのだと思います。そしてどんな時でも憍慢の心が起ると「たちどころに」仏さまの心にそむくのだということになります。

これと同じ意味で、著名な御法語に「智者の振舞をせずして、ただ一向に念仏すべし」があります。知の不足している者に限って智者ぶります。知ったかぶりをしている者は、まことに気の毒といわねばなりません。これもあれも十分に知らぬと思う心があればこそ、新しい問題と研究の道が求められてくるのです。これは日日愚にかえることであります。真に研究心の強いものなら自分の愚を知っています。よく反省するものなら自分の愚に気がついています。これを還愚といいます。

反省する心がいかに大切であり、いかに深くなければならないかについては、上人の御詞の中に拝することができます。例えば「かくのごとくして、昨日もいたづらにくれぬ。今日も又むなしくあけぬ。今いくたびかくらし、いくたびかあかさんとする」「かなしきかなや、善心はとしどしにしたがひてうすくなり、悪心は日日にしたがひていよいよまさる」は痛烈であります。善導大師すら「自身はこれ煩悩具足せる凡夫なり」とし、「わが身をば善根薄少なりと信じて、本願をたのみ念仏せよ」と申されています。

季節の話

雨安居

嵯峨諦教

今月十一日は暦の上で入梅である。来月上旬までのこの雨は、時には水害をともなうこともあるが、なんといっても田植えにとって不可欠のものであって、全く有難い雨である。その上、この頃の東京では空前の水不足で、各地に時間断水が行われており、その意味でも、適度な黄金の雨を降らせてもらいたいものである。

梅雨期と農繁期は切っても切れないもので、農家の皆様には全く感謝しなくてはならない時期でもある。一方、一般サラリーマンにとって、とくに、ハイキングや家族旅行を予定していた人にとって、祭休日の雨は風情があるなどとはいっていられない。梅雨はなおさらである。しかし、レジャーは生活の合理化などである程度は造り出すことはできるが、できたレジャーの利用の仕方は、外的な慰労といった面のみしか語られていない。このような意味において、レジャーの善用を釈尊当時（前五～六世紀）のサンガ（僧伽―僧の集団）にみたいのである。

○

インドでは毎年雨期が我国より永く、夏を中心として前後で三、四ケ月間くらい続くので、拡大しつつあったサンガも自然条件からくる教団統制の規定をもうけなくてはならなくなった。これが雨安居（うあんご―夏安居ともいう）の規定である。その規定ができるまでは、この雨期でも一所不住の遊行托鉢の生活を行ない、諸方を遊歴していたのであった。ところが、「シャモン・ゴータマ（釈尊）は、虫類が繁殖し、若木や若草が発育する雨期に、歩き回って、それらの動物や植物をふみつけ、殺し枯らすような無慈悲残忍なことをする」という噂を聞いて、比丘（仏弟子）達は釈尊に申しでた。それだけの理由ではなく、比丘達にとって夏期は暴雨に逢って、衣鉢坐具針筒を漂失するなどの実際問題も含まれていた。そこで以後、夏の雨期の三ケ月間は安居すべき習慣が採り入れられるようになった。おそらくこの規定は、元来インド古来の旧習（とくにジャイナ教などには盛んに行なわれていたようである）によったものであるが、それがサンガの規定として行なわれるようになったのは、釈尊成道後、二、三年の

これだけは……

○六月は一年中でも最も気候の悪い時期。先ず更衣。気温の上下はあるにしてもやはり夏遠からじで、上衣を脱ぎ、白いシャツすがたがみられる。梅雨に入って、保存食の手入れが必要であり、また一方、梅干漬けがみられる時期。そんなときであるから夏家具の用意も怠ってはならない。

○この雨期を待っている花がある。菖蒲つつじ、合歓花。せめてこれらの花で、湿気の多い家庭を明るく。

○梅雨は農作物にとって、待ちに待った時期。また今年も豊作でありますようにとお百姓さんのこの祈る気持。水田の整備施肥も終って田植が始まる。その上、大豆、粟、稗、蕎麦などの種播に、いんげん、オクラ、唐からし、胡瓜、茄子などに追肥をやる時期。

○春から夏への過渡期である梅雨は、アジア・モンスーン気候帯の特色の一つである。しかし「雲の上には太陽がある」ということ、これだけは知って生活したい。

頃ではないかと思われる。

そこで、遊行比丘が一定の場所に集合して飲食臥具の供養を受け、遊行中のもろもろの罪を懺悔し、釈尊の教えを請うて相互に坐禅修学を行い、自恣の日（ほしいまゝに自己の所犯の罪を他の比丘に対して挙げて、これを懺悔する日のことをいう。また、他の人の意に随ってその所犯を挙ぐれば、随意といわれる）が終れば、また再び遊行のために、各地に分散し、教化を行なうように定められたのである。その時期については、四月十六日に始まり、七月十五日に終り、その翌日を自恣の日とされていたり、かの有名な玄奘の記録には、五月十六日より九月十五日に至るとされており、雨期の三四ケ月が当てられていたのである。しかしながら、仏教が西域、中国、日本と伝播されるにつれ、諸地方の自然条件により、夏安居に対して冬安居などもみられる。これらは西域や我国などにみられ、夏安居と冬安居を共に備えていた宗派が、我国にも見られる。なお我国においては、延喜式（天武天皇の十三年に行なわれた）に、「凡そ十五大寺の安居は寺別に講師読師及び僧三口、沙弥各一口を会し、四月十五日より七月十五日に至り、経を分ちて講説すべし」とあるのをもって、その始めとされている。しかし時期こそまちまちではあるが、その目的とすべきところは、如何なる国においても違うはずはない。

このようにして、衆生教化に忙しい彼ら比丘達も、夏の雨期を利用し、真の自分自身を振りかえり、懺悔し、反省し、常に自らを鞭ち打ち、菩提（悟りのこと）を求める心を養っていたのである。

○

毎日忙しい生活に追われ、たまの祭休日くらいはと私達は思いがちであるが、この梅雨を見ることによって、遠い昔の釈尊当時のサンガの生活を思い出し、私達の生活を振りかえってみるだけの心の余裕を、せめて雨の祭休日くらいは持ちたいものであり、自己を反省することによって明日へのエネルギーを蓄わえ、そうすることによって、心の平安を養いたいものである。

聖典講義

選択集私解 偏依法然

その十二

一、たたんだ扇子

竹中信常

外人が日本人の持ちものをみて、感心するものが二つある。風呂敷と扇子である。フロシキの便利なことはいうまでもない。扇子もまた仲々便利である。ひろげてあおげば涼しい風をおこすし、たためば、至極簡便にポケットや帯の間におさまる。扇子をひろげたり、すぼめたり出来るのは、骨の根本がカナメ（要）でとめられてあるからで、カナメをはずすと、骨はバラバラになってしまう。そこで、大事なことをカナメというのであるが、浄土のおしえを扇子にたとえて、「ひらけば三部経、たためば選撰集、かなめは一枚起請文」ということがいわれる。選択集はたたんだ扇子のようなもので、これをひらくと浄土三部経、すなわち無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経になり、それはまた同時に釈尊一代の説法たる全仏教にまで及ぶものでもある。そしてその根本はガッチリと、「一枚起請文」によってとめられているのである。

それならば、選択集中にはどのようにして浄土三部経がたたみこまれているのか。

「わたくしにいわく、およそ三経の意（こころ）を案ずるに、諸経の中に念仏を選択して、もって旨帰（しき・帰結）となす」

と述べられている。いうなれば「念仏を選択する」ことを通じて、三部経のすべてを統一せられたのである。ここに有名な「八選択」がみられるのである。

八選択とは弥陀、釈迦、諸仏が浄土三部経及び般舟三昧経（はんじゅざんまいぎょう）の諸経から、それぞれその帰結たる念仏をえらびとられたことをいうのである。その名目を挙げようならば、次の如くである。

一、選択本願（特に念仏を本願とす）
二、選択摂取（弥陀の光明、念仏人を照す）
三、選択化讃（弥陀の化身、念仏を讃ず）
四、選択我名（弥陀名号を選びすすめる）
五、選択讃歎（念仏を無上功徳と讃ず）
六、選択留教（念仏一法をとどめる）
七、選択付属（定散を捨て、念仏を付属す）
八、選択証識（六方諸仏念仏を証識す）

このうち一から四までは弥陀、五から七までは釈迦、八は諸仏が選択されているのであって「選択」ということはただに宗祖が勝手におこなったことではなしに、諸仏みずからがこれをおこなっておられるのである。

ちなみに、上にかかげた八つの選択については、それぞれの章においてくわしく述べられたものであって、選択本願については第三章段に、選択讃歎は第五章段、選択留教は第六章段、選択摂取は第七章段、選択化讃は第十章段、選択付属は第十二章段、選択証識は第十四章段にそれぞれ述べられている。

こうして八選択は、宗祖の選択を経典の上に根づける重要な証拠というべきであって、詮じていうならば、全仏教を浄土三部経の上にまとめ、これを更に八つのポイントにおさえているものといえよう。そして、この八つのポイントはすべて、「選択念仏」という規格のもとに統一されているのである。

「しかればすなわち、釈迦、弥陀、及び十方各々恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したまう。余行はしからず。ゆえに知んぬ。三経ともに念仏を選びて、もって宗致とするのみ」

二、迫真のリズム

「おもんみれば、それすみやかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法（すぐれた法門）の中、しばらく聖道門を閣（さしお）きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行の中、しばらくもろもろの雑行を抛（なげう）ちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中、なお助業（じょごう）を傍（かたわら）にし、選んで正定をもっぱらにすべし。正定の業（ごう）とは、すなわちこれ仏名を称するなり。名を称すれば、かならず（浄土に）生ずることを得。仏の本願に依るがゆえなり」

いままで、珠玉のように秀麗な選択集の文面に、いたずらな蛇足を印してきたが、ここにいたっては、もはや加うべき

なにものも知らず、ただ、上にかかげた数行の原文をありがたく拝読するのみである。

この文章をくりかえし、くりかえし味読するならば、選択集全巻の精髄が心底に透徹して来るような心持がする。そこには、宗祖一代の念仏信仰の実践が、脈々といきずいている。しかも、それは文字通り、脈をうっているのである。世にこの一節をさして「法然の三選択」とも「略選択」とも呼びなしているが、みらるる如く、その文章はきわめて格調高く、リズミカルに、宗祖が念仏信仰に到達するまでの思考過程をうたい上げているのである。聖道門から浄土門へ、雑行から正行へ、助業から正定業へと、一掘り二掘り三掘と、その思索の鍬を段々に深くして、その底に数修称名念仏の一行をみいだされているである。閣・抛・傍と、息もつかせずにたたみこんでゆく、その思考のリズムと表現の手法とは、さながらに名指揮者の演奏をきくが如く、胸に強く迫って来るものを感ずる。

しかも、このように強い迫力をたたえてでるのは、それが単なる理論的な、教理上のおしすすめではないからである。通説に従えば宗祖は四十三才にして「浄土宗」を立教されたのである。むろん開宗に至るまでにも、われわれ一般凡愚のために、その救済の道を懸命にさがし求められたのであり、その結果の立教であったのである。宗祖自身の血のにじむような修行体験が裏うちされているのである。……ところで、それから二十一年の才月を経て、宗祖の六十六才の時、選択集が書かれたのである。わたくしたちは、この二十一年の才月をじっくりとみきわめなければならないと思う。なぜなれば、宗祖といえども人間であり、人間である以上、二十一年の短かからぬ年月を何等の変化もなしにすごされたとは考えられない。してみれば、開宗より選択集著述までの期間、宗祖は何をなさったであろうか。これには色々の見方や推測がなされるであろうが、わたしはあえて「体験のつみかさね」とみたい。されば、巻末の一節に次の如くに述べられている。

「ここにおいて貧道（自分を卑下した言葉）、昔この典（観経疏）を披閲（ひえつ――ひらいて読む）して、ほぼ素意（善導大師の根本精神）をさとり、たちどころに、余行をすててここに念仏に帰す（四十三才・立教開宗）。それよりこのかた今日（選択集著述の六十六才）に至るまで、自行化他ただ念仏をこととす。（自分で念仏をはげむと同時に、他人にも念仏をすすめた）」

くりかえし述べて来たように、浄土教が、従って、同時に、宗祖の教説が立つところは衆生の側である。罪悪生死の凡夫

と伍して、「自身はこれ煩悩具足せる凡夫」であるという立場から出発しているのである。それ故、そこには当然、凡夫としての悩み、もだえ、苦しみが脈打っており、自身がこれからぬけ出ようとされたわけである。しかれば、宗祖の生活はそのまま凡夫の生活であり、従ってそれは、必死な念仏生活にあけくれしたものにちがいない。つまり、二十一年の凡夫としての生活の積み重ねが「選択集」となったといえよう。「おれだけは別だよ」と、高座に坐って衆生を眺めおろしているのとはちがう。選択集の一番大切な、或人によってはこの文からよみ始めなさいとまでいわれた上掲の文が、異常な迫力をもって胸にせまって来るのも、それが宗祖自身の体験から打ち出されたものであるからこそである。

三、ひとえに宗祖による

一般の学説や理論の場合とことなって、宗教とか信仰とかといった精神上の問題の場合には、古来の伝統とか伝承とか、先人の言説とかにポイントを置いて、これを力ある典拠として論をすすめるのがならわしとなっている。そして、この典拠の置き方、伝統のとり方いかんで、さまざまの教説が立てられもするのである。

現在のわたくしたちにとっては、宗祖の言葉が何よりもたよりとなり、これを指針としてゆくことが至当である。それというのも、宗祖が亡くなって七百五十年の才月が無量の重みとなっているからである。むろん、同時代の場合でも、親鸞聖人が法然上人にひたすら信じしたがったということもあるが、これは、その人自身の強い帰依の心があってのことである。一般の、とくに理窟ぼくものを考える人間を心から従わせるには、才月の厚みを持ち、権威ある典拠をそなえるにしくことはない。

宗祖が、中国浄土教の祖、善導大師を何にもまして尊敬し、信頼されたのも、御自身の信仰上の理由もむろんあったであろうが、それと同時に、当時の民衆に念仏信仰をすなおに植えつけるためでもあったようである。こうした憶測は、あるいは教学の上からは許るされぬかも知れぬが、宗祖の凡夫を思うこころもちを察するならば、あながち附会とはいえぬであろう。

「しずかにおもんみれば、善導の観経の疏（しょ）は、これ西方の指南、行者の目足なり。しかればすなわち、西方の行人、かならずすべからく珍敬すべし。中について毎夜夢中に僧ありて、玄義を指授す。僧は恐らくはこれ弥陀の応現ならん。しかればいいつべし、この疏はこれ弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐（中国）相伝えていゆく、善導は

これ弥陀の化身なりと。しからばいうべし、またこの文（善導の観経疏）はこれ弥陀の直説（じきせつ）なりと。すでに写さんと欲する者、もっぱら経法の如くせよといえり。」

静かに考えてみると、善導大師の著「観経疏」は、西方浄土にむかう唯一心の案内書であり、浄土行者にとっては、目や手足のようになくてはならぬものである。西方極楽往生の願うものは、かならずこの書物を尊重せねばならない。伝えられるところによると、善導大師がこの書を執筆されている際、毎夜夢の中に一人の僧が出て来て、観無量寿経の深く微妙な真義を指ししめし、教えさとされたということである。夢中にあらわれた僧とは阿弥陀如来のあらわれであったろう。したがって観経疏は阿弥陀仏が自ら親しく説かれたものというべきである。中国の唐の時代以来、善導大師を阿弥陀仏のかりにあらわれた姿があるともいい伝えられているのである。このように、善導大師自身お書きになっていることと、中国の諸師の伝えていることとを照らし合せてみると、観経疏はこれ阿弥陀仏の真説であり、これを書写しようと思うものは、他の仏説経典を書写するのと同じように、丁寧に扱うべきであるといわれているのである。

宗祖が善導大師について、また大師が著述された観経疏について、このようにまでいわれているということは、宗祖がその信仰的立場からされていると同じに、自らの信仰が善導大師を通じて、阿弥陀仏にまでつらなる不動のものであることを説述されたものにほかならない。そして、このことがいわゆる「偏依善導」――ひとえに善導による――といわれ、当時の民衆の念仏信心に、どれほどの重みを加えたかはいうべき要もないことである。

ただ、ここにいうべきことは、先にも述べたように、わたくし達は、宗祖以来七百五十年のつみかさねを持っているということである。この時の流れは、わたくし達に、「偏依法然」――ひとえに法然上人によれ――ということを物語るものである。このことだけ、この四文字を心に刻みつけることが、今日にいきる念仏者のなすべき唯一つのことがらなのである。

七百五十年の歴史の厚みの上に、宗祖の姿は善導大師と同じく、弥陀の化身として輝いているのであり、「選択本願念仏集」は、弥陀の直説として珍敬せられるべきなのである。

四、窓前にのこすことなかれ

宗祖が選択集を書かれた当時の仏教界は、まことにむずかしい論義のもてはやされていた時代であった。したがって、宗祖のように、一切の学問をぬきにして、いままでおこなわ

れていた仏法の、あれもすて、これもすてて、ただ称名念仏せよといわれたのでは、仏教学者としての立場がなくなってしまう。当然はげしい反対や迫害がおこなわれたのである。そうした渦中にあって、なお敢然として、選択集執筆を決心され、これを断行されたのは、こうした時代にこそかえって、浄土教信仰の痛痒（つうよう）が感じられ、また、まさしくその時期であるとの判定の結果であった。コチコチ、カラカラに、理窟でもってなしかためられた仏教に、涓々（けんけん）と湧き出ずる念仏信仰の甘泉の如きうるおいを、いまにしてそそがなければ仏教は永遠に枯死してしまうであろうこのように悟られた宗祖は、悲壮な決意で選択集を書かれたのである。

「こいねがわくば、一たび高覧を経てのち、壁底に埋めて、窓前にのこすことなかれ。おそらくは破法の人をして、悪道に堕せしめんことを」

右のような一文を以って、選択集の叙述を結ばれた宗祖の胸底には、逆に、念仏信仰こそが、時代を風靡しつくすことの卓見がひめられていたのである。

春秋の筆法をもってすれば、わたくしが愚筆を駆して本稿をおこし、且つ、ここに至って筆をおくに当って述べたいことは、この「私解」をもまた壁底に埋めて、いたずらに窓前にのこすことのないようにしていただきたいことである。

（文学博士）

力士の金剛珠

人々はみな仏性を具えているのに、人々の間に貴いものや賤しいもの、富めるものや貧しいもの等の区別があるのは何故か。また人々はお互に殺したり殺されたり、欺いたり欺かれたりして、問題を起し、相争っているのはどうしたことであろうか

ここに宮廷に仕えていた一力士の話がある。彼は眉間に小さな金剛珠を飾ったままで相撲をとった。ところが額を強く打ったので、珠が皮膚の中にめり込んで、その上に瘡を生じた。力士は珠をなくしてしまったと信じ、ただ単に瘡を癒してもらうべく医師の許に行った。医師は診断してみて、珠が皮膚の下にかくれているために瘡ができたことが判った。そこで医師は鏡を持ってきて、力士の面をみさせ珠がかくれていることを力士に教えた。

人々の仏性もこのように、善知識に近づかなければ、自分の仏性の在所を知ることができない。人々には仏性があるにかかわらず、貪りと怒りと愚かさのために覆われている。また業と報いに縛られているために問題を起しては争うことになる。

力士が医師の明るい鏡によって珠の在所を教えられたごとく、人々は仏のみ光りにより煩悩という皮膚の下、仏性のあることを知る。

表紙の写真

泣きべそ弥勒

弥勒菩薩像　京都　広隆寺

いくら梅雨期だからと思っていても、長雨には閉口する。いっそ一度にドカンと降ればと思っても、これぱかりは思うままにならない。人間は勝手なことを考え寝言をいうけれども、雨ほど風情のあるものはないであろう。四季を通して降る雨にはそれぞれに特色がある。慈雨もあれば洪水になる恐雨もあり、スポーティな雷雨もあれば春雨のようなロマンチックなものもあり、いつまでもあきらめきれない失恋型の梅雨もある。

ともあれ大自然を洗い流す雨は豊かな詩情を誘い、喜びも悲しみも相い交えて幾歳月を過ぎて来たのである。これは単に雨の状態ばかりでなく、人間にあてはめてみても不自然ではない。子供と大人、男と女と、しかもその時々でいろいろに変り、複雑な状態になって行くのはいうまでもない。

太秦の広隆寺といえば弥勒菩薩といわれるように、誰しも前かがみの頬を、軽く指先で支え静かに冥想する姿を思い出すであろう。美術に全く関心のない人でも、きっとこの像だけは何かの折に見たというように、この像の美しさはみんなの心にしみこんでいる。そのためか、同じ広隆寺にありながら写真の弥勒菩薩は忘れられている。

この像は宝冠をつけている有名な像と区別するために「泣き弥勒」といわれている。それは、目のふちから一すじの涙のあとに似たシミがついているからである。

しかしそんな説明はぬきにしても、このポーズ全体から受ける感じが、見る人の心を何とはなしに悲しい方向に引っぱって行く。泣き弥勒とはまさに名言である。上半身を心もち前にかがめ、引きしまった体についている顔は一見こわそうに見えるけれども、伏目がちに見開いた目をうるませ、上下不自然なほどの力強いくちびるは、こらえようとしてもこらえきれないでシャクリ上げる状態をにくらしいほどうまく表現している。

この像の作者がどのような考えで作ったのかは知る由もないが、誰にもわからないようにそっと涙をふいているような右手といい、息を吸ったときの状態をみごとに表現している胸から腹にかけての線といい、憂いを一層強めている大切な要素であることはいうまでもない。心なしか、肩から前に下った天衣までが震いているような感じさえ与えている。また髪の生えぎわから結び上げられた美しい宝髻は、冷たさと悲しさを増させる要素ともなっている。

私が京都を訪ねたのはちょうど昨年の今頃であった。いやな雨をついて広隆寺に詣で、はじめてこの像があることを知った。そして座高九〇糎のやや小ぶりの像の前に立ったときは感慨無量であった。それにしても、飛鳥末期の優れた彫刻である泣き弥勒は、この寺にあるかぎり、宝冠の弥勒の陰に忘れられた形になっている。目のふちからついているシミも、この像が人知れず流した涙のあとかもしれない。そして降り続く梅雨のように泣き続けることであろう。（鈴木成元）

最新刊　浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

——御法語の栞り——

B6版　十六頁
定価　十五円
送料　十円
二十部以上五分引
五十部以上一割引
百部以上二・三割引

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
五、弥陀名号の功徳（無礙光とは）
六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
七、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
八、あとがき

東京都千代田区飯田町二ノ八
申込先　法然上人鑽仰会
振替東京八二一八七番

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価　格　100円　送料実費
（10部以上割引あり）

美麗2色刷　32枚綴　上質紙使用

法要その他の記念品に最適（箱入・寺名等刷込の相談に応じます）

申込先　東京都千代田区飯田町2の8　法然上人鑽仰会　振替　東京 82187　電話(332) 5944

「浄土」講読規定

一部　定価　金五十円
（送料　六円）

会費一カ年　金六〇〇円
（送料　不要）

浄土　六月号

昭和十年五月廿日　第三種郵便認可
昭和三十七年五月廿五日　印刷
昭和三十七月六月一日　発行

定価　五十円

編集人　村瀬秀雄
発行人　佐藤密雄
印刷人　関二三男
印刷所　新光社印刷株式会社
東京都千代田区飯田町二ノ八
発行所　法然上人鑽仰会
電話東京三三二局五九四四番
振替東京八二一八七番

伝通院本
木活字板 **大般若経解説** 近刊 堀口蘇山著

願主 福田行誡 企劃 細谷琳瑞
文久二年壬戌摺写着手、慶応二年丙寅完成。五ヶ年苦辛の馬連摺。奇くも本年一百年に相当、本書は即ちその記念出版。

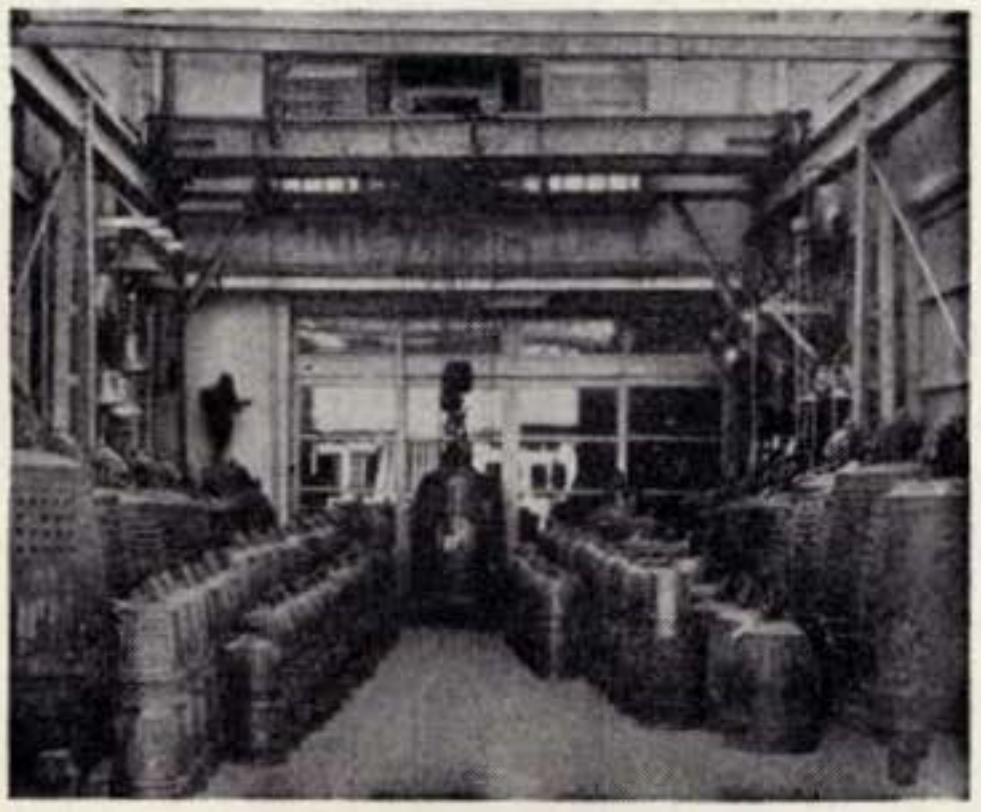
○日本書誌学上の善本
○幕末文化史研究資料
○木活字板最終の勲迹
○吉水門流文化史上の一異彩
○書下二百枚、貴重資料図版三十
○和紙半紙判、目下印刷中、内容目次、頒価、次号に。
○製本、安養虎角手沢本に倣擬、稀有の製本型、以て好学奇節の虎角を偲ぶべし。
○筆者は、高僧行誡の風貌を俊乗房重源に比し、学僧琳瑞を五山学僧桃源瑞仙に擬した。
筆者はそれほどに行誡と琳瑞とを篤く景仰しつつ、本書を執筆した。
○戒律厳守の祥道を恋慕する信女善尼、琳瑞の学業を追美する持名、徹定、願海、智満等四大蔵書家の英姿は、書中に勇躍。
○本書は、浄土世界へ巡礼中の、笹本戒浄学士と小野玄妙博士との学友に、一読を乞うべく執筆した。

東京都中野区野方町二ノ一五七四
芸苑巡礼社
電話(389)一三三八番
振替口座東京七八三四一番

日本一の生産・設備

梵鐘（45cm～85cm）
喚鐘（12cm～51cm）
音響 理学博士 青木一郎先生
梵鐘界の権威 日展参事 芸術院賞受賞 香取正彦先生

在庫豊富



日本最初の黄綬褒賞
（昭和三十年四月廿七日）
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目
大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 **老子（おいこ）製作所 大阪支店**
電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和三十七年五月二十五日印刷 昭和三十七年六月一日発行
浄土 第二十八巻 第六号 定価金五拾円（六円送料）